



Title	リチャード・ハミルトンの《いったい何が、今日の家庭をこれほどにも変え、魅力的なものにしているのか?》のもう一つの意義：マテリアルのメディアに着目して
Author(s)	吉村, 典子
Citation	デザイン理論. 2023, 81, p. 54-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91064
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

リチャード・ハミルトンの《いったい何が、今日の家庭をこれほどにも変え、魅力的なものにしているのか?》のもう一つの意義

マテリアルのメディアに着目して

吉村 典子 宮城学院女子大学

はじめに

英国の美術家リチャード・ハミルトン（1922-2011）の《いったい何が、今日の家庭をこれほどにも変え、魅力的なものにしているのか?》（以下、《いったい何が…》と表記）は、ポップ・アートの先駆的作品として誰もが知るものであり、この作品の「ポップ」としての意義は今や自明のこととなっている。これは、今日ではコラージュによる美術作品として扱われているが、世に出た1956年当時は、グループ展のポスターや図録の一頁を飾るものとして印刷され、公衆の目に触れることになったものであり、グループ展では実作品が展示されたわけではなかった。つまり、コラージュ作品自体は後になって公表され、それが専ら美術書等で掲載されてきたわけである。

一方、先行研究では、画面上で扱われた「ポップ」の図像とそのマテリアルの出典については言及されているが、マテリアルのメディア自体については殆ど議論されきていない。しかし、ハミルトンのこの後の展開をみると、「ポップ」の図像よりも、そのメディアの特質こそが、重要であったと言すべき要素が確認できる。本稿は、それを「もう一つの意義」と捉え、この作品とこの後の展開を考察する。

《いったい何が…》（1956年）の「カーペット」

《いったい何が…》のコラージュを構成するマテリアルは、殆どがアメリカの雑誌等の印刷物である。唯一、中央の「カーペット」を示す部分には、写真が使われている。コラージュが、およそ

2.5倍となってポスターに拡大単色印刷されることにより、マテリアルのメディアの違いがはっきりと表れ出す。マテリアルが印刷物の場合は、印刷メディアの特質である網目が表れ出し、一方、写真のメディアの場合は、図像の細部のかたちがそのまま拡大され、抽象的な形を生み出している。

この「カーペット」のマテリアルは、ハミルトン自身がかつて入手したポストカードで、イングランドのウィットレイ・ビーチとそこで海水浴をする人々が写ったものである。印刷物ではなく、写真がそのまま葉書となって市販されたものである。ハミルトンがこれに着目したのは、その写真にとらえられている風景や海岸の大勢の人々というよりは、「1000分の1秒のシャッター1つで、ある夏の日のウィットレイ・ビーチの800メートルをこえる範囲の活動のこんなに多くの情報をとらえていること」にある。このハミルトンの言葉から、彼の驚きは、砂浜の溢れんばかりの人々、つまり、イメージの内容にあるのではなく、カメラがとらえたイメージということになる。

《いったい何が…》の制作プロセスをみると、ハミルトンは、当時のアメリカを中心とした大衆文化を分析して、15の言葉「男性、女性、人間、歴史、食物、新聞、映画、TV、電話、漫画（絵情報）、言葉（テキスト情報）、テープ録音（音声情報）、車、家電、宇宙」を掲げ、それに関わるマテリアルを集め、コラージュに仕立て上げている。この15の語のうちの「人間（Humanity）」のイメージとして、このポストカードが使われた。まさに人間がポストカードに写っているが、そのさらに

人々が密集した部分を彼自身のカメラでとらえて、引き延ばした部分をコラージュに用いた。無数の群衆の情報、そして、写真撮影という媒介の作用によって、あたかもヒョウ柄にみえるようになったところが、「今日の家庭」の「カーペット」を擬態していることになる。

「カーペット」から、《People》(1965年)、そして《Mother》(1968年)へ

1965年より表れ出すハミルトンの作品《People》もまた、前掲のポストカードを用いた作品である。ハミルトンは、カメラの蛇腹を使用して極端なクローズアップを可能にさせ、35mmのネガを生成し、そこから8×10インチにプリントしている。そして、これを数回繰り返す。ポストカードに写るビーチはかなり混雑している。そのため写真の引き延ばしにより集団は塊となり、集団から離れている人物は人として認識できるところもあるが、引き延ばしの繰り返しにより、認識困難になっていくと同時に、また別のものを想像させるようなイメージへと変容していく。その変容した形に関連するイメージを、ハミルトンは所々に手描きで加えてもいる。「アノニマスの人々の外見が(引き延ばしによって)浸透するにつれて、グループの関係性の無限のパターンを生みだし、同様に、単体で認識できる人物についてもより多くの要素を生み出している」というハミルトンの言葉から、イメージを拡大することによって発見できる情報に興味を持っていたことがわかり、「究極には、拡大が、何の形か認識できないほどの銀塩(感光物)の抽象的な塊になるところまで我々を導く」ことにも彼の関心があったことがわかる。そして、「グループの無限のパターン」の一つとして「抽象的な塊」が生み出したハミルトンのイメージが「マザー」であり、これが1968年発表のマルチプル《Mother》となったと言えるであろう。

一方、《People》のヴァリエーションに、所々にコラージュしたり、手描きで図を加えたりする

ものもみられるが、これは、ハミルトン自身が言う「図と写真、シンプルに描き入れたような印、あるいは、加えられた実際の物もしくはその模倣、こういうものどうしの違いに関心があり(中略)これらにより意味のレヴェルや読み方が倍増する」ことによる。さらに、ハミルトンは次のようにも述べている。「私が驚嘆するのは、印や形が、単純であろうと複雑であろうと、我々の意識を拡大させる能力を持ち(中略)、主情的で審美的な反応を引き起こし、内的、外的つながりが観者の想像力を働かせることを可能にすること」にあると。

おわりに

以上のハミルトンの言葉は、《People》や《Mother》が発表された後に、出版された記事(“Photography and Painting,” *Studio International*, March 1969, pp.120-25.)に掲載されたものである。様々なメディアを通して、「我々の意識の拡大」や「想像力を働かせる」ことが制作を通して試みられていることがわかり、これはこの後の展開にも見られる要素である。これに類する内容はハミルトンの次の言葉にも表れている。「求められることは、表象の意味を明確にすることではなく、留まることなく豊かになる視覚世界を受け入れ、そして活用するために、我々の潜在的知覚能力を開発させることにある。」これは、本稿で端緒とした《いったい何が…》が最初に公表された図録(Whitechapel Gallery, *This is Tomorrow*, 1956)に記載されている言葉である。従って、マテリアルの展開は、《いったい何が…》、《People》、そして《Mother》という実作品に見られるだけでなく、思想としても、既に《いったい何が…》が発表された1956年にあったことがわかるのである。以上のことは、《いったい何が…》の制作プロセスの中で、多様なメディアと向き合ったことに起因すると言えるであろう。